

富山県

新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

1999年度

2000年3月

新湊市教育委員会

富山県

新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

1999年度

2000年3月

新湊市教育委員会

序

新湊市は天然の良港である放生津潟を擁し、縦横に走る河川によって周辺の地域と結ばれ、その水の利を活かし、古くから日本海側の海運と漁業の拠点として発展してきました。

鎌倉時代には越中守護所がおかれ、また室町将軍足利義材が滞在するなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えました。

往時の活発な人々の交流、物資の運搬などその賑わいが偲ばれます。

先人が残した歴史・文化・風土は、現代に生きる私たちが今後引き継ぐ貴重な財産です。市内にのこる遺跡も、地域に根ざした歴史を語る財産であり、郷土資料の一つと言えるでしょう。

昨年度から、遺跡地図を整備し、また開発行為との事前調整に役立てるため、市内遺跡の分布調査を始めました。今年度は、その3年目にあたります。

この報告書には不備な点も多々あると思いますが、より多くの人に活用され、文化財保護の一助になりましたら幸いです。

終わりになりましたが、地元の方々をはじめ多大なご協力とご援助をいただきました関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成12年3月

新湊市教育委員会

教育長 糸岡栄吾

例　　言

- 1 本書は、新潟市教育委員会が国庫補助をうけて5か年計画で実施している、遺跡詳細分布調査の3年目（1999年度）の調査報告書である。
- 2 調査は富山県埋蔵文化財センター、富山大学考古学研究室の指導および協力を得て、新潟市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 今年度の調査は、新潟市七美・片口地区及び海老江地区の一部を対象とした。
- 4 現地調査参加者は下記のとおりである。（敬省略　五十音順）
浅野良治 阿部 来 井出靖夫 猪狩俊哉 囲田一広 片桐清志 澤野慶子 田中洋一 床平慎介
戸籠暢宏 豊田恒一郎 山下 研
- 5 本書の作成は、下記の協力をうけて新潟市教育委員会文化財保護主事 宗 融子が行った。
(敬省略　五十音順)
浦山みこと 楠井悦子 立野浩美 前田三津子
- 6 現地調査にあたって七美公民館はじめ地元の方にご協力、ご理解をいただいた。本書の作成にあたっては、久々忠義氏から貴重なご教示をいただいた。また写真の借用に際して菊昌治氏にお世話になった。記して謝意を表したい。
- 7 採集遺物、記録図面等は新潟市教育委員会が一括して保存・公開している。
- 8 本書の図面・写真図版の表示は下記のとおりである。

(1) 第4図の凡例は次による

- 埋蔵文化財包蔵地
- ▲ 古代遺物
- ▼ 中世遺物
- 近世以降遺物

目　　次

序 文	
例　　言	
目　　次	
I はじめに.....	1
1 新潟市の地勢と環境.....	1
2 調査の目的と方法.....	1
3 1999年度調査区概要.....	2
II 調査の概要.....	4
1 調査結果概要.....	4
2 まとめ.....	4

図面目次

- | | |
|-----|----------------------|
| 第1図 | 新潟市位置図 |
| 第2図 | 調査地区割図（1/7万5千） |
| 第3図 | 1999年度調査地区概要図（1/5万） |
| 第4図 | 1999年度調査地区遺跡地図（1/2万） |
| 第5図 | 遺物図（1/3） |

写真図版

- | | |
|-----|--------|
| 図版1 | 航空写真 |
| 図版2 | 水郷風景 |
| 図版3 | 水郷風景 |
| 図版4 | 現在の風景 |
| 図版5 | 調査風景 |
| 図版6 | 調査風景など |

| はじめに

1 新湊市の地勢と環境

新湊市は、富山平野を南北に分ける呉羽山丘陵の西側に位置する。

富山湾へ注ぐ庄川の、最下流東岸に広がる低湿地を中心にその市域を形成している。東西11.25km、南北6.74kmと東西に長い市である。人口は約3万8千人で、現在の主な産業にはアルミ加工を始めとし、地場産業である製材業及び漁業などがある。

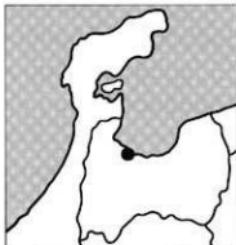
射水平野と呼ばれるこの低湿地の中央には、かつて、海退や土砂の堆積によってつくられた放生津潟があり、現在は富山新港として利用されている。

放生津潟は绳文時代前期の绳文海進のころは、現在の射水丘陵のあたりまで広がっていたとみられる。その後、気候の寒冷化に伴い次第に陸地化し、庄川・和田川・下条川・鐵治川・神楽川などの諸河川によって運ばれた砂や粘土は、所々に微高地を形成していった。そして、氾濫流路間につくられたこの自然堤防洲などを中心に、この土地での人々の生活が始まったと考えられている。

古代には高岡市伏木に国衙が置かれ、近くには巨理湊が設けられた。しかし気候の寒冷化に伴う海面の低下によりその機能が低下したため、現在の新湊市街地である放生津にその機能が移されたと考えられている。鎌倉時代中頃には、放生津の地名が現れるようになる。越中の守護所が置かれるなど、中世の放生津は越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

往時は三角州の末端のように低湿で、特に潟の周辺は水郷の低湿地であったという。低湿地の多くが水田に利用され、縱横に水路が走り、タズルやイクリと呼ばれる舟の交通路ともなっていた。稻架用と水路の岸崩れ防止に植えられたトネリコ並木が、水郷地帯ならではの独特的の景観をかもし出していたが、昭和30年代から40年代にかけてすすめられた富山新港設置やほ場整備などにより、湿地解消の努力が重ねられ、周辺の景観は一変した。

2 調査の目的と方法



第1図 新湊市位置図

新湊市では昭和30年代から40年代にかけて富山新港設置やほ場整備など大型の事業がすすめられた。これまで工事中に上器などの遺物が見付かっても注意が払われることは少なく、あるいは工事の妨げになるものとして除外されることもあった。かつては海であり、新湊市のように低湿な土地には人々は生活していかつ

たと考えられがちだったのだろう。

富山県が発行した昭和47年『富山県遺跡地図』には、新湊市の遺跡は34か所記載されている。また平成5年度発行の『埋蔵文化財包蔵地地図』には、39か所の遺跡が記載されている。これは、昭和40年代の調査が基本となっており、伝聞・推定によるものや、開発行為に先立つ調査によって明らかになったものが多く、未調査地域も残されているものと思われる。

ここ数年、開発行為に先立ち散在的に行なう分布調査や発掘調査によって、新たに発見される遺跡や、範囲の修正が必要と思われる遺跡、中には人知れず葬られていった遺跡も少なからず存在することがわかつてきだ。

そこで、埋蔵文化財の保護と活用、開発行為との調整のため、市域全体を対象とする系統だった分布調査を実施し、遺跡地図及び台帳を充実させることとした。

調査は、新湊市が国庫補助をうけ、富山大学考古学研究室、富山県埋蔵文化財センターの指導と協力を得てすめることとなつた。市域を5つの地区に区分し、平成9年度から平成13年度まで5か年の予定で行うこととした(第2図)。順次現地調査を実施し、その成果は年度ごとにまとめるものとする。また最終年度には、小字名などを調査するとともに市内全体をまとめた遺跡地図を発刊する予定である。

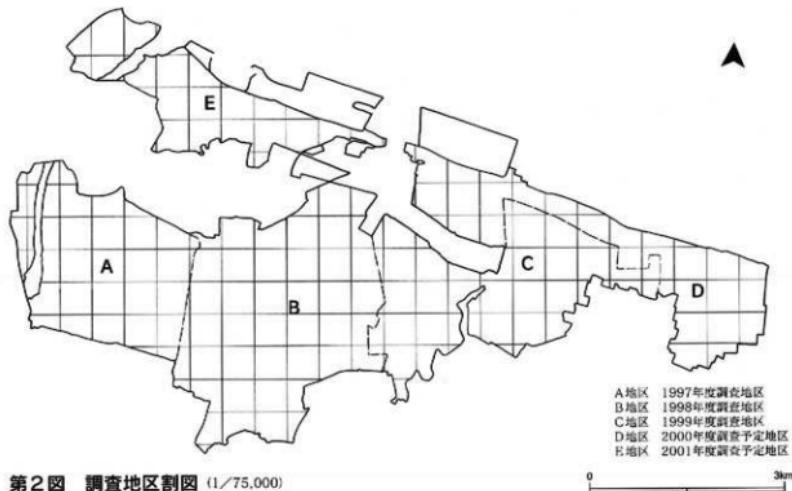
3 1999年度調査地区概要

今年度の調査対象は、新湊市の中央部から東部に位置する片口・七美地区である。また、開発計画がもちあがつたため、次年度調査予定であった、七美地区に隣接する海老江緑合の一部についても、調査対象に含めるとした。

片口はもと潟口とも記され、旧下条川に沿って集落が南北に営まれており、またその東側には旧殿治川が七美地区を流れていた。かつての放生津潟の東南辺に広がるこれらの地区は、極めて低湿な水郷地帯であった。特に、下条川や殿治川付近では水害の被害が絶えなかつたといふ。旧下条川の改修は大正13年、旧殿治川の改修は昭和15年に着工されたが、射水平野の排水となつていったこれらの川は、それ以前は蛇行し、川幅も狭いことから氾濫することが多かつた。といったん氾濫すると、標高ほぼ0mのところで生活が営まれていたこれらの地区では、水害の被害が絶えなかつた。

またこれらの地区は、放生津潟の泥を客土として水稻を作っていた湿地帯でもあった。縱横に巡らされた排水路や河川を、イクリとよぶ長舟やタブルとよぶ舟が行き交い、澤田に最も適した舟による水運交通が発達していた。また、水郷農業独特の特色ある風景をかもしだしていたのは、水路や川岸に植えられていたトネリコ並木である。トネリコは1~2m間隔で植えられ、稻干架に利用されたり、川の上手が崩れるのを防いだりもした。ひところは10数万本もあったといわれるトネリコも、水田の影になることから伐採の命令が出され、片口以外の地域では昭和の始めごろまでには姿を消した。一番最後まで残っていた片口地区でも、昭和40年代の新港の造成と乾拓化により見られなくなつた。

現在市指定の天然記念物として知られる水島柿発祥の地は、片口高場である。潟周辺の肥沃で潤滑な風土によって生まれた水島柿は、水分が多く芳潤な香りが特徴の甘柿である。やはり昭和40年からの射水平野乾拓化などにより本数は減少したが、大正期には指定地域内に4,700本余りもあったといふ。



第2図 調査地区割図 (1/75,000)



第3図 1999年度調査地区概要図 (1/50,000)

II 調査の概要

1 調査結果概要

(1) 周知の遺跡

今回の調査対象地区は、新湊の中ではもっとも周知の遺跡が少ないとある。周知の遺跡は、1972年発行の「富山県遺跡地図」より知られていた、下記の1遺跡のみである。

① 下久々江遺跡

七美、新堀川の河口にあるが、現在は埋立地となっており事实上消滅している。昭和40年代の富山新港構築以前に知られていた遺跡と思われる。台帳によると、時代は縄文であり、採集された縄文土器が保管されていたらしが詳細は不明である。

(2) 調査結果

今回の調査区における遺物の分布状況は、極めて散発的であった。また表探できたもの多くは近世陶磁器である（第4図）。表探した場所によっては、山砂のような土壤のところもあり、遺物がもともとの場所から移動している可能性もある。

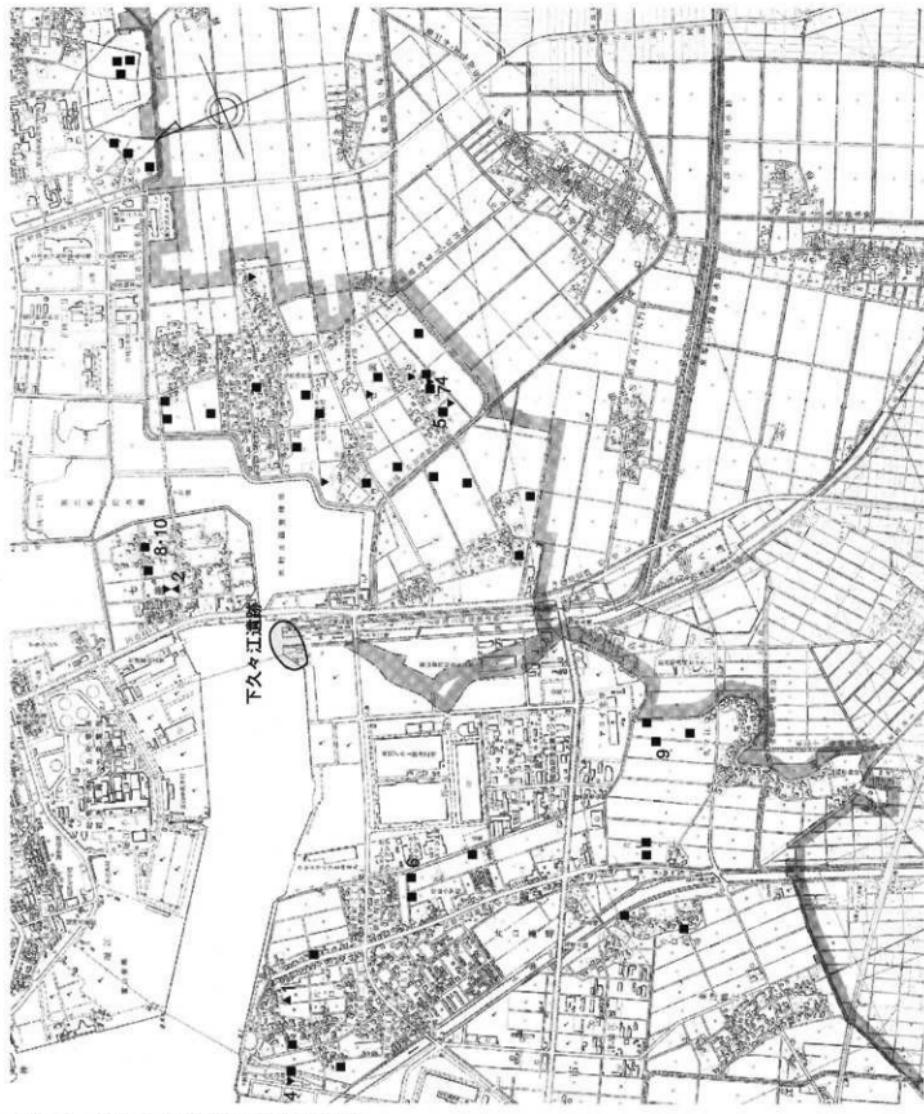
そのうち、図示したものは下記のとおりである（第5図）。

1と2は須恵器である。1は杯蓋天井部分である。天井が平坦になるものである。2は高台杯で、高台径は6.4cmである。3～5は珠洲焼である。3は片口鉢である。口径34cm、口縁部は肥厚した内側に広く面を取るタイプで、口縁部に櫛目波状文が施される。4も片口鉢で、口縁端面はほぼ水平になる。5は壺胴部である。外面叩目は紋杉状になる。6～8は越中瀬戸である。6は皿である。底部は糸切りで、鉄軸が施される。7の皿は削り出し高台で、高台径4.0cmである。鉄軸が施され、見込みに重ね焼の痕跡として砂目がみられる。8の皿も削り出し高台で、高台径4.0cm、鉄軸が施される。9は伊万里皿である。口径は12cmである。内面に草花文、外面には唐草文が描かれる。高台下端は無釉で砂が付着する。10は瓦器である。体部が垂直に立ち上がる火鉢とみられる。

(3) まとめにかえて

もともと周知の遺跡がほとんどなかった調査区であったのだが、今回の調査においても遺跡としてのまとまりを見出すにはいたらなかった。

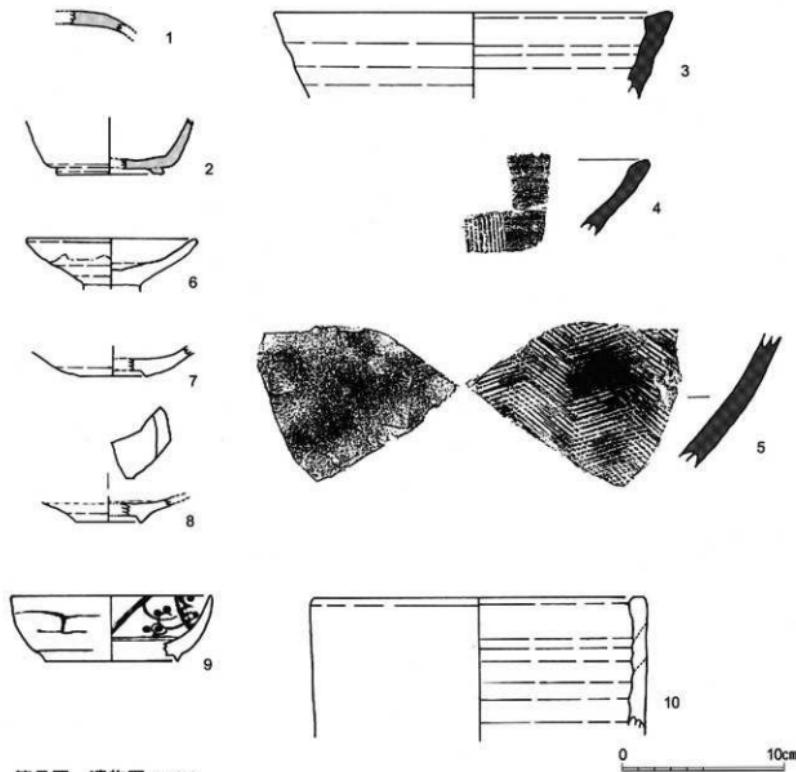
しかし、今回の表面採集による分布調査の結果のみから、この地域に遺跡は存在しないとするのは危険である。河川が幾度も流路をかえ、氾濫が繰り返されたこの地域の過去の成立を考えると、遺跡が深いところにもぐっている可能性があるからである。今回の調査区の南西に位置する津幡江では、地表面より約1m下の層から縄文土器が出土している例もある（新湊教委1999）。低湿な環境で遺跡が良好に保存されていることも推測されるのである。



第4図 1999年度結果概要図 (1/20,000)

図中の番号は第5図遺物番号と対応する

0 1km



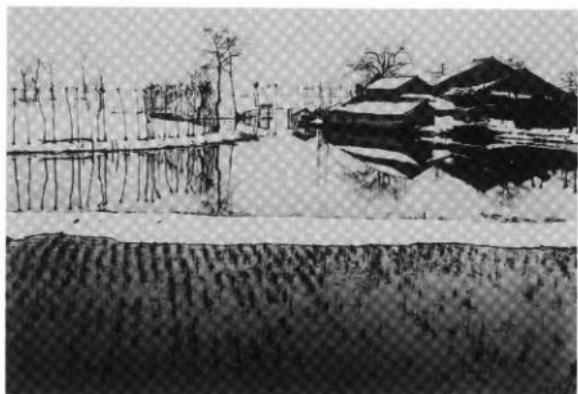
第5図 遺物図 (1/3)

【参考文献】

- 新湊市 1964 「新湊市史」
- 新湊市 1992 「新湊市史 近現代」
- 新湊の歴史編さん委員会 1997 「しんみなとの歴史」
- 七美郷土史編纂委員会編 1983 「しちみの歴史」七美連合自治会
- 新湊市教育委員会 1999 「新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ」
- 平凡社地方資料センター編 1994 「日本歴史地名大系第16富山県の地名」
- 富山県教育委員会 1972 「富山県遺跡地図」
- 富山県教育委員会 1993 「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」



昭和22年（米軍空撮）





旧下条川



イクリで稻を運ぶ



下条川の開削工事







七美柳瀬
地内五輪塔



第5図遺物

報告書抄録

ふりがな	とやまけん しんみなとしまいぞうぶんかざいぶんぶちょうきはうこくⅢ							
書名	富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ							
編著者名	宗 茂子							
編集機関	新湊市教育委員会							
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312							
発行機関	新湊市教育委員会							
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市内遺跡	富山県 新湊市内	市町村	遺跡番号	36°47'00"	137°05'00"	19990510 20000331	-	-
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
市内遺跡	-	古代 ～ 近世	-	-	須恵器 珠洲焼 近世陶磁器			

平成12年3月31日発行

富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

編集 新湊市教育委員会
 発行 新湊市教育委員会
 富山県新湊市本町二丁目10番30号
 印刷 株タニグチ印刷

